

ZENCOLO

ゼンコロ

2021.1

No.169



- 羅針盤
- 第5回ゼンコロ版アビリンピック総評と講評
- 北から南から
- 障害者権利条約を受けて、私たちは何をなすべきか？
- なかまの声
- 私の旅行記
- お薦めの本
- 自慢の作品—シリーズ

一般社団法人 ゼンコロ
〒165-0023 東京都
中野区江原町 2-6-7
電話 03-3952-6166
発行 中村敏彦



羅針盤

インクルーシブ社会
を改めて考える

会長 中村 敏彦

はじめに

寒さも厳しい季節になりましたが、新型コロナウイルスの勢いはとどまることを知りません。今年は東京オリンピック・パラリンピックが開催されるのでしょうか。収束に向かい、万全の予防対策とともに無事に開催されることを願います。

パラリンピックは、国際的なスポーツイベントですが、単に障害者の競技大会ではありません。わずかな数日間のために根気強く鍛え上げていく情熱や努力、それを支える人々や社会環境など、参加国の違いによる障害のある人たちの暮らしが垣間見られたり、様々な可能性を見出す機会にもなるものと思います。

公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会のホームページに興味深い記事が掲載されていたので、後半の1964年について書かれている19番目の記事を紹介したいと思います。

2014年11月11日付、タイトルは、「1964年と2020年の東京パラリンピックに関する20の事実」です。

19. 東京1964大会開催は日本における障がいを持つ人々への認識にポジティブなインパクトを与えました。これにより労働省は障がい者の身体的及び精神的能力を認め、彼らを雇用する工場を創設しました。

この事実は、ゼンコロが原点として、英国で1915 (大正4) 年、傷痍軍人の結核患者が医師・看護婦と共に建設したパップワース移住村、つまり、結核回復者が、条件が整えば労働し、自立できることを社会に示したもので、「リハビリテーション」即ち人権回復の宣言に繋がるものでもあります。

ゼンコロでは、海外の保護雇用制度などを国内に紹介しながら必要性を訴え、1972年、身体障害者福祉工場の開設をもって一歩前進することができました。もちろん、創設するためには、多くの関係者が尽力し、相当の努力の積み重ねが必要であったことは言うまでもありません。

このように、ひとつのイベントがきっかけとなり、障害のある人たちの能力が認められたことをもってすれば、知ることや知ってもらうことの大切さを改めて考えさせられます。何がきっかけとなり、人の心を動かし、また社会を動かすのか、明快な答えは出せないものの、前に進み続けることが重要だと思います。

そのためには、一部の人を孤立させない、排除しない社会づくりをめざすことが肝要です。本稿では、最近よく耳にする「インクルーシブ」について考えてみたいと思います。

インクルーシブの定義

「インクルーシブ」は、1994年、スペインのサラマンカに92か国の政府および25の国際組織を代表する300名以上の参加者が集まり、スペイン政府がユネスコと協力して開催された国際会議で「万人のための教育 (Education for All)」の目的を前進させるための検討の際、「インクルーシブ教育」のアプローチを促進することとして、教育分野で使用されたことがきっかけとなったようです。(参考資料: 障害保健福祉研究情報システム)

その語源は、「ソーシャル・インクルージョン」(社会的包摂) という言葉から来ており、これは「あらゆる人が孤立したり、排除されたりしないよう支援し、社会の構成員として包み、支え合う」という社会政策の理念を表

します。現代社会の課題克服そのものといえるのではないのでしょうか。そして、障害者権利条約の策定プロセスにおいては、最も議論になったテーマの一つが「教育」であったといえます。

インクルーシブ教育

各国の法律や制度は当然異なります。障害分野では、障害の定義の違いや障害種別による違い、あるいは当事者や支援団体の考え方にも違いがあり、良し悪しや不十分など一概にこうと言い切れません。障害者権利条約が採択される国際レベルの議論において、障害者教育で問題になったのは、一般教育制度で教育を行うべきか、特別な教育環境が必要なのかという点であり、各国共に同様の課題を抱えていると思われます。権利条約の第24条教育) のキーワードは、まさに「インクルージョン」「インクルーシブ」でした。様々な議論が交わされた結果、最終的に「インクルーシブ」とされました。第1項で、締約国は「あらゆる段階におけるインクルーシブな教育制度」を確保すると規定しています。これは、教育課程で、障害児とそうでない児童が一緒に学ぶことを意味しています。第2項(b)では、住み慣れた地域でインクルーシブな教育が受けら

れること、同項(c)では、個人に必要な「合理的配慮」を行うことを求めています。原則として、過度な負担がない限り、他の者との平等を基礎として、実質的に平等に権利を行使し、享受できるための変更や調整のことと理解できます。合理的配慮を行わないことが、差別であるとした機会の均等を保障するための新たな概念といえるでしょう。

とは言っても、実際に通常教育にすべての障害児を受け入れて、真の教育が可能なか疑問が残ります。障害といっても個別に大きな差があり、配属教員の人数や質、教室の物的環境にも、劇的な配慮が必要となるのではないのでしょうか。

インクルーシブ雇用

最近では、雇用にも「インクルーシブ雇用」という言葉がよく使用されています。2018年、超党派により「インクルーシブ雇用議連」が設置されました。超党派の国会議員と市民側の団体との間で、2016年から勉強会を重ねて実現したものです。設立趣意書では、『これまでの障害者の雇用施策については「障害者雇用促進法」に基づく雇用率制度、一方で、「障害者総合支援法」に基づく、就労移行支援事

業、就労継続支援A型・B型事業などを中心に組み込まれてきたが、わが国が障害者権利条約を批准してからは、障害者施策全般にわたる検討・整備がされ、雇用・就労分野においても、関係法制度の見直しなど、新たな議論や取り組みが展開されている。しかし、一般就労も福祉的就労も、ともに本来あるべきディーセントでインクルーシブな環境とは到底言い難い実態となっている』としています。本来あるべき雇用環境を実現するために期待したいところではありますが、前述したインクルーシブ(あらゆる人が孤立したり、排除されたりしないよう援護し、社会の構成員として包み、支え合う)雇用と理解した場合、障害者総合支援法を根拠法に運営している会員法人で構成されているゼンコロとしては、どのような環境であれば、それが実現できるのだらうと思ひ悩むのであります。

そういう意味では、インクルーシブ教育と同じ課題に思えます。ゼンコロは、結核の回復者たちが、自ら生きていくための手段として、働いて稼ぎ、生活を支えるという、ごく当たり前のことをめざし、実践し、60年を迎えます。しかし、ゼンコロの実践では、私たちが必要としている障害者の雇用や豊かな生活を営むだけの所得保障は、現実問題として達成できていないこと

も事実です。また、法が求めている雇用率を達成するために、障害者雇用に努力している企業を責めることもできません。やはり、インクルーシブ雇用を実現するためには、相当踏み込んだ制度改革が必要なのでしょう。

インクルーシブ社会

さて、教育と雇用の分野でインクルーシブ環境を概観してみました。

パラリンピックに戻りましょう。「パラリンピックの生みの親」といわれるロードヴィヒ・グットマンは、ドイツから亡命し英国のストーク・マンデビル病院に勤務しました。そして、リハビリテーションにスポーツを取り入れることが有効と考え、実践していきます。入院患者を対象としたストーク・マンデビル競技大会を開催し、ついにパラリンピックに繋がっていきます。同じく、「日本パラリンピックの父」と呼ばれる、1965年に「太陽の家」を創設した中村裕^{ゆたか}医師は、グッドマンの元で学び、1964年、東京オリピック後にパラリンピックを開催することを要請し、実現させました。パラリンピックは一つのスポーツイベントではありますが、開催までの道のりや実施できるまでの背景などを知ると、インクルーシブ社会の実現に向

けたヒントがあるように思えて仕方ありません。何かをつうじて新たな発見があり、現実にある課題解決のためにあらゆる可能性に挑戦することの大切さを学びました。

まとめに

わが国では、地域共生社会の実現に向けて様々な取組が行われ、本誌でも何回か取り上げてきました。インクルーシブ社会とは、一言でいうと「分け隔てのない社会」です。そういう意味では地域共生社会と重なります。地域社会の中で、誰ひとり取り残さない、分けない、差別しない、一人ひとりが社会の構成員となつて、みんなが支え合う社会。実現するためには相当の困難を伴いますが、障害者権利条約は決して妥協していません。インクルーシブ社会の実現は、制度や物理的環境はもちろん大切ですが、最も重要な視点は、心の問題であり、インクルーシブの考え方をあらゆる場面に浸透させることだと思ひます。私たちは、「決してあきらめない」精神で、少しずつでも、段階的にでも、前に進められるよう、努力を続けたいと思ひます。コロナ禍の中ではありますが、本年も、どうぞよろしく願ひします。

第5回

交流型技能競技会
(ゼンコロ版アビリンピック)

Zoomで開催

去る10月31日(土)、ゼンコロ版アビリンピック(第5回交流型技能競技会)が開催されました。昨年大型台風によって延期された熊本県コロナー協会のご協力により、熊本で開催予定でありましたが、今年度もまた、新型コロナウイルスに阻まれました。一時は断念という声も上がる中、そこはゼンコロの底力、感染予防を徹底して何とか実施できないかと試行錯誤を繰り返し、ようやくリモート(Zoom)を活用して実施することとなりました。

【総評】(会長 中村敏彦)

コロナ禍の中、よもや競技会が開催できると思っていませんでした。例年であれば、競技種目はDTP、ビル・クリーニング、喫茶サービスの3種目で開催していましたが、なにせ集合競技会ではないのですから、DTP部門のみの開催となりました。DTP競技とはいえ、Zoomを使用して果たして開催可能なものなのか、そこから始まったこの企画、事前準備には、新しく事業部会長に就任された山口県コロナー協会の佐々木久美総務課長、熊

を終えることができました。昼食も各参加者の地元で用意され、Zoomをつづじての交流の場となり、大変珍しい貴重な競技会となりました。

【講評】(東京コロナー コロナー東村 山所長 坂本 崇)

今回の課題は、熊本県近郊のバリアフリーのお店や施設が探せるスマートフォンアプリを紹介するチラシの作成でした。北から順に講評していきたいと思っています。

●山形県コロナー協会 板坂友昭さん

見た瞬間タイトルが目飛び込んできます。画像の大きさや角度に変化をつけることでダイナミックな躍動感がありながらも、全体にバランスよく配置されており、楽しい雰囲気仕上がりになっています。

●山形県コロナー協会 佐藤恵美さん

タイトルから視線を下に移動していくと、「アプリのダウンロードはこちら」で明確にQRコードに誘導され、とても分かりやすい配置。全体的なバランスもきれいにまとまっています。

●ながのコロナー 佐山いせ子さん

背景が優しい色使いで統一され、スッキリとキレイにまとまっています。文字の大きさ、余白の使い方への配慮が効いていて、視覚的に分かりやすい作品です。

●ながのコロナー 長崎和志さん

このまま電車の中吊り広告に使えそうな仕上がり。シンプルな色使いで全体のバランスも絶妙です。オリジナルの文言がふんだんに追加されていた点が、「工夫」の範囲とするかどうか、審査員としての判断が難しいところでした。

●東京コロナー 安藤大さん

縦長の紙面を真ん中の帯と下部の波線で三分割、上段はメインのタイトルとホーム画面、中段には店舗情報と地画面、下段にはQRコードを配置して、整理して伝えようという意図が伝わってきます。

●山口県コロナー協会 佐伯一美さん

タイトルは描き文字でしょうか？イラストが大きめに使われており、他の競技参加者にはない個性を感じました。「熊本」がフキダシに入っているところなど、細かな工夫も効いています。

●山口県コロナー協会 高橋卓哉さん

緑と青空を背景にし、出かけたくなるような楽しい雰囲気が表現できています。ぽっかり浮かんだ雲の中に文字を配置するナイスアイデア。

●福岡コロナー 杉山美智子さん

背景もタイトルも全体にパステルカラーでまとめてあり、統一感のある色使い。三つの画像を並列で配置し、よく整理されていて見やすいデザインです。

●熊本県コロニー協会 堀口真司さん

淡い緑の背景に円形の白マドを作り、文字等を配置するというアイデアがいいと思います。特に右下のQRコードに目が行きやすく仕上がっています。

2時間というとても短い競技時間内で作品を完成させるのは、並大抵のことではありません。大変な集中力と普段の仕事で培ってきた経験あってこそなしえるものだと、改めて感じ入りました。競技参加者のみなさん、お疲れ様でした。

第5回ゼンコロ版アビリンピックに参加して

◆山形県コロニー協会 板坂友昭

ゼンコロ版アビリンピックにおいて、事務局はじめ参加された全ての皆様、コロナ禍の中競技会を無事開催出来た事に感謝します。お陰さまで最優秀賞をいただき本当に有難うございました。相互審査をする上で私の審査ポイントが、課題の指示はもちろんですが、オペレーター独自の工夫を重点にしました。来年は画面越しでなく直接会えるといいですね。GOTO熊本！

◆山形県コロニー協会 佐藤恵美
今回、初めて交流型技能競技会に参

加しました。職場の方からアドバイスを受け練習に取り組めたのはよい経験となりました。オンラインの大会でしたが、競技を通してみなさんと交流でき大変嬉しかったです。今度はぜひお会いしてお話しできればと思いました。今回の経験を仕事に活かせるよう、これから頑張ります。ご尽力くださった皆様に心より感謝申し上げます。

◆ながのコロニー 佐山いせ子

第5回ゼンコロ版アビリンピックに参加しました。

4回目の参加。毎年レベルが高くなり、不安しかありませんでした。

緊張と焦りで今回も思い通りには出来ず反省点ばかりです。

賞には届かなかったけど、様々な工夫を凝らした作品を見ることができて良かったです。

直接お会い出来なかったのは残念でしたが、今年も貴重な経験をありがとうございました。

◆ながのコロニー 長崎和志

昨年は台風の影響で熊本に行けず、今年は新型コロナウイルスの影響で初めてのZoomでの開催となり、始めはどの様な感じになるのか不安でしたが無事競技も終わりリモート食事は少し恥ずかしながら食べました。皆様の表情が分かり楽しい時間を過ごす事ができました。次回は皆様に直接お会

いできる事を願っております。初めてのZoom開催にご尽力いただきありがとうございました。

◆東京コロニー 安藤 大

第2回大会以来の参加となりましたが、Zoomを用いての大会ということに参加者の方とのコミュニケーションのとりに戸惑いつつのスタートとなりました。2回目の参加ということでも、緊張感も薄れるかと思いましたが、実際は終始緊張しながらの作業となるものの、なんとか完成する事ができ、完成できなかった前回より少しは進歩したかなと、胸をなでおろしました。

◆山口県コロニー協会 佐伯一美

今年はリモート形式でDTP部門のみ開催されました。初のリモート開催でトラブルもありましたが、慣れや工夫により競技が始まる頃には解消され、皆さんがスムーズに進行できていたように思います。競技後のリモート昼食会ではお弁当の見せ合いをしたりと楽しむことができました。もっと話したいと思ったので、また参加できましたらそのときは直にお話できたら嬉しいです。

◆山口県コロニー協会 高橋卓哉

初めてゼンコロ版のアビリンピックに参加しました。緊張感のある空間で自由に作ることがふだんなかなかないので、素晴らしい経験をさせてもらい

ました。

他の競技者との交流もでき、後日参加した全国アビリンピックに向けてのモチベーションにもなりました。

今後も貴重な経験を活かして、自身のスキルアップにつなげていきたいと思っています。

◆福岡コロニー 杉山美智子

皆さん個性がありよい刺激となりましたし、大変勉強になりました。コロナの影響で異例のことではありましたが、リモートならではの良さも見つけることができ、貴重な体験をさせていただきました。また参加できる機会がありましたら次回は皆さんと直接お話できることを楽しみに、コロナが早く収束されますよう願っています。

◆熊本県コロニー協会 堀口真司

今回、ゼンコロ競技会に初めて参加しました。Zoomによるリモート開催でしたが、皆さんの頑張っている姿に刺激を受けました。成績は振るわなかったものの競技会を経験した事を、今後の成長につなげる為にこれからの仕事や私生活に反映していきたいです。まずは職場内でも交流を増やしていければと思います。

ぜひ次回予定の、熊本開催も参加できればと思っています。

● 第5回ゼンコロ版アビリンピック『熊本バリアフリー MAP』●



ながのコロニー・佐山いせ子さんの作品



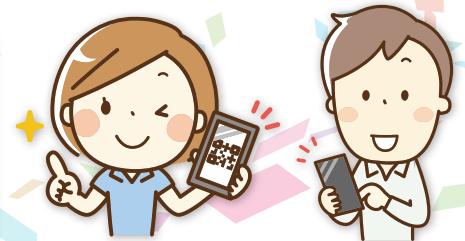
山形県コロニー協会・佐藤恵美さんの作品（優秀賞）



山形県コロニー協会・板坂友昭さんの作品（最優秀賞）



ながのコロニー・長崎和志さんの作品（技能賞）



東京コロニー・安藤大さんの作品

山口県コロニー協会・高橋卓哉さんの作品



熊本県コロニー協会・堀口真司さんの作品



福岡コロニー・杉山美智子さんの作品の



山口県コロニー協会・佐伯一美さんの作品

● 第5回ゼンコロ版アビリンピック ●



コロナ渦もあり、Zoom を利用したリモートによる競技会となりました。



参加者全員には参加賞として藍染めのエコバックとマスクが贈られました。



熊本県コロニー協会での競技の様子



ながのコロニーから参加したお二人の競技風景



最優秀賞の板坂さん(写真右)と優秀賞の佐藤(写真左)さんには表彰状が送られました。



技能賞の長崎さん(写真中央)には表彰状が送られました。



青 森

コロナ禍の今

青森県コロナー協会
相談支援事業所こうばた
相談支援専門員 今井 悠

当事業所は平成26年より相談支援事業を始めて約7年が過ぎようとしています。開設当初は管理者1名兼務・相談支援専門員2名専従体制でした。開設当初に相談支援専門員を拝命しましたが、3年後には障害者支援施設に異動となり、その後の体制は相談支援専門員1名となりました。

今年の4月に相談支援専門員として戻って来ましたが、一度携わった仕事とは言え1名体制での仕事量は想像を絶していました。前任者が良くこなしていたとつくづく思います。4月に配属となり約半年間経過していますが、未だ以って手探り状態で管理者や前任者には都度指示を仰ぎ何とかやっています状態です。



今は新型コロナウイルス感染症の関係で面会制限等があり、モニタリングがあつた利用者様の中にはま

だ面会出来ない方もいらっしゃると思います。相談支援は面談が基本ですが、今のこのコロナ禍での特殊な状況下では厚労省からの事務連絡を参考に対処していくしかないかもしれません。独り事業所の為、万が一の時の事を考えると不安で仕方ありませんが…。

こうした中でも、新しい生活様式を取り入れ、当事業所の相談室では面談時には窓を開け、密にならないよう心がけています。これから冬本番となり、雪国青森では換気が難しくなります。乾燥する時期となり、更なる感染拡大が騒がれていますので、自宅等へ訪問する際は自らが感染源になつたり、感染することがないよう予防策を講じ、何とかこのコロナ禍を乗り切りたいと思います。

山 形

「地道な努力」

山形県コロナー協会
山形福祉工場
営業課 鎌田 浩

令和2年11月26日県庁講堂に於いて、当法人職員で構成する河川愛護活動団体「坂巻川に親しむ会」の、活動10年目を迎えたことに対し、山形県知事より感謝状を拝受いたしました。この活動は「山形県ふるさとの川愛護活動支援事業」として行うもので、県民・企業・行政の協働により河川環境整

備を進める活動です。



に須貝理事長が代表となつて、協会敷地内に隣接する河川環境の向上を求め発足しました。

会員は協会職員による構成で、桜田拠点の各事業所より参加いただき11名で活動しています。

活動範囲は河川を挟み両岸で約200mを、草刈り、ゴミ拾いを行い美化・収集清掃に努めています。活動期間は草木が生え伸びる5月頃から10月まで行い、作業は肩掛け式刈払機を使い伸びた草を刈っていきます。作業

町内には「須川の環境を守る会（H15～）」「クリーンアップ鳴沢川（H18～）」がそれぞれ活動しております。当会の発足は平成22年

当法人の所在地（桜田南地区）には、東に「鳴沢川」西に「須川」北に「坂巻川」と三方に河川があり、



時間は2時間程で、夏の暑い時期は熱中症対策を取りながら膝上まで伸びた草と格闘しています。

ご近所の方から刈り終えた河川を見て「いつも綺麗にして凄いですね。」とお言葉を掛けていただき嬉しく思います。

会員の皆様には河川愛護活動を理解し、地道な努力を重ねて10年目を迎えたことに敬意を表します。また、この活動により桜田南地区と連携し交流を深め、さらに地域に貢献できる協会を目指し、職員一同努力していきます。



初日は施設内をかばちゃやおばけ、ラントンなどで飾り付けをします。つるし飾りやキャップアートは利用者さんに作ってもらい

ました。1つ1つの作品に個性が出て、枠にとらわれない作品ができました。「こんな飾りがあるんだね」「雰囲気が出るね」「あの人たちが作ったんだ」と、ハロウィンにあまり馴染みのない利用者さんは驚いていました。

例年であれば10月はコロナー祭を開催しています。屋台で食事販売やステージで音楽、マジックなどのパフォーマンス。利用者さん、ご家族、地域の方々が毎年賑わいをみせていました。

しかし、今年はコロナで中止となり、その代わりに「ハロウィンウィーク」と称して、1週間、イベントを行いました。外部の人は招かないで、利用者さんと職員で感染対策をしながら行いました。

長野
ハロウィンウィーク
ながのコロナー
ワークサポート篠ノ井
丸田佑香



最終日には、今年大流行した鬼滅の刃のキャラクターや志村けんさん・加藤茶さん・バカ殿様に扮したステージ、

4日目には、マジックショー&ダンスのステージ披露。ピコ太郎さんの手洗い促進の曲も流し「手洗いが重要です」というメッセージも届きました。お天気にも恵まれ「何が始まるんだ?」と皆さん興味津々です。いざ始めると笑いや温かい雰囲気包まれて盛り上がり、ステージ上の職員のダンスを見て一緒に体を動かす方もいました。

2日目と3日目には、お昼休憩の時間に、仮装をして写真を撮るフォトセッションを行いました。マントや被り物、杖などの小道具を利用者さんが自分で選び、なりきって写真を撮ります。皆さんとても楽しそうな表情で、普段とは違う笑顔をみせてくれました。

2日目と3日目には、お昼休憩の時間に、仮装をして写真を撮るフォトセッションを行いました。マントや被り物、杖などの小道具を利用者さんが自分で選び、なりきって写真を撮ります。皆さんとても楽しそうな表情で、普段とは違う笑顔をみせてくれました。

新型コロナウイルスの影響によりすべての日常が大きく変わり、メディアで報じられない日は無い状態となつて間もなく1年が経とうとしています。関わってきた医療従事者からは既に30万に迫るような症例報告等が寄せられて

東京
つもりでコロナを
乗り越えよう!
東京コロナー
仲町就労支援事業所
所長 井上忠幸

獅子舞の披露。衣装やメイクなどを職員で用意し、本気でステージ披露している様子を利用者さんも笑いながら見てくれました。獅子舞には疫病退散の意味もあります。どの方も健康に楽しく過ごしていただけたますようお願いしました。

新型コロナウイルスの影響で、利用者さんご家族とも会いにくい、という我慢が多い1年でした。施設内で小規模ではありますが季節を感じられる行事ができ、「楽しかった」という感想を多くいただきました。笑うことでナチュラルキラー細胞が活性化され、免疫力アップにつながります。自律神経が整うとも言われています。自粛生活の中で、利用者さんの笑顔がたくさんみられたことを嬉しく思います。

いると聞いています。まだコロナ感染者が少なかった頃には、コロナ感染に伴う差別や誹謗中傷も起きていました。今もなおそうしたことが起きているのは耳にしますが、社会的に「コロナ慣れ」してきたようにも感じます。事業所を利用されている方の中には、重篤な症状になる可能性が高い基礎疾患がある方も少なくありません。

私たちの事業所では、実は新型コロナウイルスが流行する以前、昨年の11月より基本的な感染対策の周知と啓発を続けてきました。毎年冬を迎える時期になるとインフルエンザの流行が始まるので、それに向けた取り組みでした。インフルエンザにも症状が重篤化することも多くありますので、どうすれば感染を防げるのかを毎朝行う朝礼でお伝えしていました。そして今もお継続して啓発を行っています。

事業運営でも大きく変化がありました。事業所の皆さんが一番楽しみにしているイベントで初夏のバーベキューと秋口の宿泊訓練がありますが、どちらも本年は取りやめとなりました。テレビをつけばコロナ、事業所いけばコロナ、日常生活のすべてにコロナがまわりついてくることで、その事によるストレスは急上昇しています。

そんな中でも、月2回のプログラム(余暇活動)だけは、感染対策をしたうえで、いろいろな工夫をしながら継

続することができています。ちなみに今は行ったつもりで！シリーズのイベントを開催しています。

ギリシャ旅行、行ったつもりでギリシャ料理をみんなで作りました。

名古屋、行ったつもりで名古屋名物手羽先を！

山形、行ったつもりで山形名物いも煮を！

西の市、行ったつもりで屋台料理を！

つもののイベントが続いています。それでも皆さん楽しんでおられます。

コロナとどう付き合っていくか、日常の中でどう実践していくかは、正しい知識を学びながらリスク回避を楽しくむということなのでしょうね。

※すべてのプログラムは感染対策を行ったうえで実施しています。



あかつき

ウエス洗濯作業

あかつきコロナー
あかつき授産所
作業部三課 主任 田中隆子

作業部三課では歌舞伎場で有名な株式会社天乃屋さんから委託されたウエス洗濯作業を行っています。おせんべいを作るレーンを清掃したウエスの洗濯作業です。

油や細かいおせんべいがたくさん付着したウエスを業務用の洗濯機でお湯洗いし、つい先日購入した業務用ガス乾燥機で乾かします。今までは毎日400枚〜800枚前後のウエスをパ

ラソルハンガーに干し、扇風機で乾かし翌日畳みの作業を行っていましたが、ガス乾燥機では30分程度で乾かすことができます。当日に作業が終われるようになります。乾燥後はコロコロで糸くずなどのゴミを取り、取り切れなかったゴミをピンセットで取り、しわを伸ばしてきれいに畳みます。



作業部三課の中では人気No.1の作業で、利用者さんそれぞれが責任をもって毎日楽しく取り組んでいます。

ます。食に関すること、またおせんべいが直接通る機械を清掃するためのウエスなので、衛生面では特に気を付けて行っています。帽子・エプロン・アイムカバー着用後、服のコロナ掛けをして手洗いし、消毒してから作業に入ることを徹底しています。顔を触ってしまったり、今は特にマスクを触ってしまった時には再度手洗いにいき、消毒してから作業再開します。利用者さんも衛生面での意識を持って作業に取り組んでくれており、先日も天乃屋さんの方が見学に来られ、丁寧に作業していることに驚かれました。

作業部三課はウエス洗濯作業のほか、箱折り・おしぼりなど6種類の作業があり、休憩ごとに作業を変えて行っているため、利用者さんも飽きることなく取り組んでいます。どの作業でも引き続き仕事は丁寧な、衛生面はしっかりと管理し継続して作業がいただけるよう、利用者さん・職員共々頑張る作業していきたいと思っています。





『ハロウィンだよ！全員集合』を実施し、10月31日にハロウィン祭りだよ！全員集合』を実施し

山口
『ハロウィンだよ！全員集合』開催！
山口県コロナ協会
ワークショップ・山口
橋本 愛

昨年の1月以降、新型コロナウイルスが世界中に猛威を振るい、日本でも「新しい生活様式」が取り入れられ、これまでの日常が日常ではなくなりました。現在も全国で感染者が出ており、ここ山口県でも感染者数は増え続けています。年間行事であったイベントが軒並み中止や延期となり、外出の自粛を迫られるなど、利用者の皆さん、関係者の皆さんは今後の社会活動や生活がどうなるかと不安で窮屈な日々を過ごされていることと思います。

当協会では例年地域の皆さんや利用者さんのご家族をご招待し、秋にコロナウィルス感染拡大防止のため今年度は中止にしました。しかし、内部だけでも利用者さんと職員で楽しもうと、10月31日にハロウィン祭り『ハロウィンだよ！全員集合』を実施し



ました。

今回のイベントで利用者さんは希望者の方に仮装してもらいました。利用者さんの衣装は職員と一緒に準備しました。衣装や小道具を準備したり作ったりしているうちに、もったいい物を…と欲がどんどん出てきました。そして職員は全員仮装、既製品をうまく使って仮装している人や手作りでクオリティーの高い人など一人ひとりの個性が発揮されていて、会場内はそれだけで賑やかな雰囲気になりました。

ハロウィン祭りの中で利用者さんの仮装コンテストを開催し、ステージに上がって仮装姿を十分に披露してもらいました。アンパンマン、ピカチュウ、子泣き爺、スーパーマリオ等いろいろな登場しましたが、その中で優勝したのは仮面ライダーに扮したIさんでした。変身ポーズが決まった後、ショッカーに扮した職員2人との戦いが繰り広げられ、ショッカーがやつつけられるとみんなで大笑いし大いに盛り上がりました。

「くばらだんだんアート」で全国的に有名な(株)久原本家グループが主催する「だんだんアート」は社会参加と地域の活性化、また障がいのある方の経済参加のきっかけ作りを目的として2010年から開催されています。

第8回目は「一緒に食べよう」をテーマにした作品募集が行われ、なのみ工芸の利用者、田中馨さんが応募し、全国756点の応募作品から栄えある大賞

福岡
くばらだんだんアート
2020「大賞受賞」
福岡コロナー
なのみ工芸課
田中祐也

このコロナ禍の中で、内部関係者だけがこのような笑顔いっぱいイベントを開催でき大変よかったと思います。今後も感染には十分に気をつけつつ、また楽しいイベントを開催できればと考えています。



5作品の一つに選ばれました。

作品名は「OBENTRAIN」(お弁トレイン)。大好きな列車の世界観とお弁当をコラボさせた作品です。

大賞受賞の一報を受け、予定される「福岡県立美術館での表彰式・展示会」

「だんだんアートバスお披露目式」など、華やかな舞台で田中馨さんの作品が披露目されること楽しみにしていましたが、「新型コロナ」の影響で延期。そして中止が決まってしまうしました。主催者から「なのみ工芸を会場に授賞式を執り行えないか」と相談があり、できる限りの準備を整え、(株)久原本家グループ取締役荒巻和彦様、営業本部川向志季様をお迎えし開催しました。

授賞式当日、表彰状や副賞を受け取る姿を見て、これまで彼が積み重ねてきたことが社会に評価されたことをうれしく思いました。彼と初めて出会っ

た。

今回のイベントで利用者さんは希望者の方に仮装してもらいました。利用者さんの衣装は職員と一緒に準備しました。衣装や小道具を準備したり作ったりしているうちに、もったいい物を…と欲がどんどん出てきました。そして職員は全員仮装、既製品をうまく使って仮装している人や手作りでクオリティーの高い人など一人ひとりの個性が発揮されていて、会場内はそれだけで賑やかな雰囲気になりました。

ハロウィン祭りの中で利用者さんの仮装コンテストを開催し、ステージに上がって仮装姿を十分に披露してもらいました。アンパンマン、ピカチュウ、子泣き爺、スーパーマリオ等いろいろな登場しましたが、その中で優勝したのは仮面ライダーに扮したIさんでした。変身ポーズが決まった後、ショッカーに扮した職員2人との戦いが繰り広げられ、ショッカーがやつつけられるとみんなで大笑いし大いに盛り上がりました。

「くばらだんだんアート」で全国的に有名な(株)久原本家グループが主催する「だんだんアート」は社会参加と地域の活性化、また障がいのある方の経済参加のきっかけ作りを目的として2010年から開催されています。

第8回目は「一緒に食べよう」をテーマにした作品募集が行われ、なのみ工芸の利用者、田中馨さんが応募し、全国756点の応募作品から栄えある大賞



画は余暇の時間を使って創作活動に励んでおられます。さをり織りで表現する色彩、そして働くことで得られる様々な経験・社会性、それらが創作のバックグラウンドになり、作品の深みが増していたら良いなと感じています。

また、私たち支援員と一緒に働かせていただくなかで「今、どう思っているのだろう? どう感じているのだろう?」と日々考えることが多くあります。色々なツール(絵)で自己表現してくれるので、少しでも多く気づくことができるよう、日々精進しようと改

めて心に誓う機会となりました。
最後に、作品「OBENTRAIN」は久原本家オリジナル段ボールや西鉄バス、トラックにラッピングされ、様々な形で多くの人に届けられます。ゼンコロの皆さんの目に触れる機会があれば、「なかまの一人の作品」としてご覧いただけたら幸いです。

佐賀

「ミニ夏祭り」

佐賀春光園
「コロニーみやき」
生活支援員 坂井達哉

世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、当施設でも感染予防対策として、作業終了時間を少し早めて自分の机や、使用した道具をみんなで除菌する。外出行事を制限する等の影響が出ています。

そんな中、少しでも利用者の皆さんの気持ち明るくなり、気分転換になればと考え8月11日に当施設内で、利用者21名と職員によるミニ夏祭りを開催しました。プログラムとしては、ヨーヨー釣り・射的・千本引き・スイカ割りを行い、皆さん「懐かしさ」「ワクワクした」と言われ喜ばれていました。その中でもスイカ割りでは、目隠しをした割る人に周りの人が声を掛け、方向や距離を指示してスイカまで進んでいきます。これが思いのほか上手く



笑いに包まれていました。

そんな大盛り上がりだったスイカ割りですが「言葉のみで分かりやすく伝える」事の難しさを感じる体験ともなりました。周りで見ている人は当たり前のように、右や左と声を掛けますが、目隠しをしている人はそれがどれくらい右や左なのか分からず、あちこちら様々な声が聞こえてきて、訳が分からなくなっていました。

そこにあと何度右や左なのか、何歩前など具体的な数字が出てくるだけで



伝わらず、全く違う方向に進んでしまったり、スイカのすぐ横や手前の床を木の棒で叩いてしまい「手がしびれた」と話されるなど、

伝わり方が全然違うと、私自身が目隠しをしている時に感じました。「相手の事を考え分かりやすく伝える」これからの仕事にも活かしていきたい事だと感じました。

そんな笑いあり、勉強になる事ありのミニ夏祭りでしたが、11月末現在でも新型コロナウイルスの終息の見通しがついていない為、以前のような外出行事は出来ていません。

その代わり3密を避けたコスモス見学やドライブ、お弁当レクなど、少しでも利用者のストレス解消や楽しみが増えればと考え実施しています。

これからも感染対策と、利用者の楽しみやメンタルケアを考えながら行事を行っていかれると思います。

熊本

「コロナ禍だからできたこと」

熊本県コロニー協会
副工場長 後藤貴司

今年も残すところ僅かとなりましたが、いまだ新型コロナウイルスの終息も見通せない状況にあり、思い返せば7月には熊本豪雨災害と苦難の1年だったように思います。

コロナ禍にあつては、各種イベント、講演会、研修会等の中止により印刷事業を主体とする福祉工場にとって厳しい1年となりつつあります。

そんな中、福祉工場で取り組んできたものをいくつかご紹介したいと思います。

作業量が減少した時間を活用し、製造課の主任以上を対象に月1回、福祉についての勉強会を行っています。外部から講師を迎え、協会の理念、A型事業所の役割、福祉に関する制度の変化等を意見交換も交え学んでいます。熊本コロニー70年の歴史を振り返る良い機会ともなっています。

印刷事業の営業活動として、5月初めには利用者の方がデザインしたアマビエを印刷し、メモ帳を作成してお客様にお配りしました。ホームページにはアマビエ塗り絵チャレンジとしてアップしました。

また、感染予防を踏まえた新規開拓の手段として郵送による印刷物受注の依頼を行っています。毎月、熊本市内の企業、介護施設、病院等からリストアップした事業所へコロニー営業案内



パンフレットの他、アマビエメモ帳、アマビエ卓上カレンダーを同封しています。次に販促チームの活動については、

ゼンコロ広報誌164号で紹介しましたがコロナの影響により、施設販売会、商談会が中止になったことや、感染防止のため参加を見合わせたこともあり、本年は、折り紙、ノート等の製品が日の目を見る機会がありませんでした。

そこに児童養護施設へそれらの製品を寄贈したらどうかという提案が上がったのを機に検討を行いました。想い入れのある製品たちでしたが、施設の多くの方々に喜んで使っていたきたいとの思いからクリスマスプレゼントとして寄贈を行いました。今後はさらなるアイデア商品作成に力を入れていきたいと考えています。

本年は当協会においても夏まつり、忘年会と中止としました。ゼンコロ競技大会については、昨年は台風、本年はコロナと2年続けて熊本での開催が見送りとなりました。

来年こそはコロナも終息し、熊本での開催が無事に行われ、他のコロニーの方々とお会いできますことを楽しみにしております。

沖縄

ゆいぽーと焼き芋会

ありあけの里 デイサービスゆいぽーと
平良勝彦

ある晴れた日の出来事。お陽様のさんと降り注ぐ陽光の中で、皆、手

に焼き芋を持ち、美味しくそうにほおばりながら想い出を口にする。「芋には種類があるんだよ。クラガー百号、いなよう芋。あんた知ってるか？昔、畑で一生懸命栽培したよ。」と、90代の方が懐かしそうに若い職員に語りかける。それから「美味い！」と呟いて焼き芋をもう一本手に持った。

南の島、「ありあけの里」デイサービスゆいぽーとでの焼き芋会の一場面です。事業所内で焼き上げる焼き芋がとても人気で、食の細い女性もほとんど手がのびます。「懐かしいね。昔はお米よりお芋が当たり前だった。今は焼き芋の方が高いんでしょう？いい世の中になったねえ。」口数の少ない方、芋を片手に、お隣さんと透明フィールの仕切り越しに会話が弾みます。農作業の大変さ。この辺りは畑しかなかったこと。子どもの頃は大きな鍋にお芋を炊いて、そこから手で取っておやつにしたこと。懐かしそうな目では続きます。

1605年、野国総管は中国からサ



ツマイモの苗を持ち帰り沖縄で試作しました。悪天候に左右されない芋は土地によく根付き、農民に広められ、多くの村人の命を飢餓から救いました。戦時中は唯一といっていい貴重な食糧でした。荒れた大地にたくましく育つ芋は、芋と共に時代を生き抜いてきた沖縄の人々の生き様そのものです。時代の激流にもまれながらも皆、一生懸命に家族を支え、生きてきた。そんな時代背景を共にする方々が一緒に焼き芋をほおばりながら、青春時代や変わりゆく地域の風景に想いを馳せます。昔の経験や想い出を語り合うことで、精神的な安定がもたらされ、うつ症状の改善・予防につながるとされる回想法。そのアプローチの一つとして、私たちは定期的にこの焼き芋会を開催しています。

焼き芋が味覚・嗅覚に働きかけて懐かしい想い出をくっきりと浮かび上がらせる。想い出を語る方々の表情はとても生きいきとしている。誰かが歌い始めた。「芋の時代」という曲だ。戦中戦後の貧しい時代にあって、子供たちにはひもじい思いをさせまいと一生懸命働いた両親に対する感謝の歌だ。普段は落ち着きなく立ち上がりうとする方も笑顔で歌っている。コロナ疲れの職員の心も癒される。お陽様のさんと降り注ぐ陽光の中。ある晴れた日のある出来事。

障害者権利条約を受けて、

私たちは何をなすべきか？

社会福祉法人 福岡コロニー 総務部長 徳永 隆司



2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大によりゼンコロ及び各法人の事業運営に大きな影響を与えることとなりました。そんな中、6月の総会・理事会では初の書面決議により新たな役員体制が承認されました。また運営委員会では新しい運営委員長のもと、教育研修部会、事業部会、総務部会(制度政策部会改め)とZoomを活用して会議及び研修等を実施しています。前号までは役員の方々から「社会福祉法人は今、社会から何を求められているか?」と題し様々な課題、提言等を挙げて頂きましたが、今号からは新たに「障害者権利条約を受けて、私たちは何をなすべきか?」と題して、身近な問題に対する思いをお伝えしたいと思います。

障害者権利条約は当広報誌でも再三掲載されご存じだと思いますが、その制定過程で「私たちのことを私たち抜きに決めないで (Nothing About Us

Without Us)」と障害当事者が訴え続けて出来ました。その後、2006年12月に国連総会で採択され、我が国では障害者自立支援法の改正に始まり、障害者虐待防止法の制定及び障害者基本法の改正、障害者総合支援法の制定、障害者差別解消法の制定及び障害者雇用促進法の改正等、様々な法整備を行いました。2014年1月に批准されました。まさに障害者権利条約の批准する為に矢継ぎ早に法整備が行われたように感じます。

こうした十分とはいえない法制度の中で現実の場面を振り返ると、私たち障害者福祉に携わる者・事業所は何をなすべきなのか、今までの反省も含めて考えてみました。

かつてゼンコロでは、結核回復者という偏見と差別の中で、働き、生きる場を当事者自ら築き上げ、障害者の労働・雇用問題等に関して積極的に働きかけ、道を切り開いてきた諸先輩方がいらっしやいました。しかし現在は、様々な法制度と現場との矛盾を指摘し、障害当事者・利用者の目線で考えて障害者

福祉を推進する、という意識が少しずつ薄くなっているように感じます。

私たちが意識すべき問題として身近な所では、昨今ニュースでも話題になっていた駅の無人化の問題があります。

現在「無人駅」は全国の駅の半数近い4500駅余りにのぼり、利用者の多い首都圏でも時間帯によつては窓口駅員のいない駅が増加しています。そんな中、大分県で車椅子利用者3名が「駅の無人化は移動の自由を侵害する」として裁判を起こしました。「無人駅だとながら、ホームから転落しても誰がすぐに助けてくれるのかわからない。」という悲痛な訴えに対して、無人駅にカメラを設置して異変を発見できる監視システムの導入を進めていて、安全性は従来よりも高まるという返答でした。

さらにこのコロナ禍で収益が上がらない、経営の効率化が避けられない状況では駅員やサービスを減らす方向にいかざるをえなくなり、さらに無人化が進む可能性があると言われています。

以前、車椅子を利用する入所者が外出する時、何処に行くにしてもタクシーばかりを利用していたので、電車やバス等の交通機関を使うとものと行動範囲が広がるのではと持ち掛けると、町内及び近隣市等までしかなかった行動範囲が一気に福岡市中心部まで広がり、雨が酷い中でもどんどん外出するよう

になり安全確保に手を焼いたことがありました。しかし、こうした動きが出来るようになったのも近隣駅やバス会社等の合理的配慮があったからであります。また、一見するとバリアフリーに思える建物でも実際に行ってみると駅の上下線両方にスロープが無い等、まだまだ配慮が足りないと感じる所も多くあります。

こういった様々な問題を解決する為には、まず社会における障害者への理解をもっと深めていく必要があると思います。障害当事者が実際に公共交通機関を使い外に出る事等はもちろん、障害者福祉に携わる私たち・事業所が、身近な地域からでも障害者の実態や障害者が抱える問題を理解してもらう機会をつくることは大切なことだと思います。福岡コロニーでは毎年行なう祭コロニーで、地域住民と障害者が交流する場を持ち、近隣小中学校とのゲストティーチャーや体験実習等を通して障害者の現状を理解してもらう取り組みを行っています。しかしながら、まだまだ合理的配慮が足りない事は多々あります。これに対して「仕方がない」「そこそこ出来ていればいい」と諦めるのではなく、障害当事者とともに、声を上げていく必要があると思います。

私が今の作業所に入所して18年が経ちます。振り返ってみると、色々な出来事がありました。

私が入所して最初の頃は、ダイレクトメールの封入があり、電子基板の組立やいろいろな仕事がありました。入所して半年も経つてくると、出来ない作業もできるようになってきました。生まれつき自己顕示欲の強い私は、他の利用者が行なっている難しい作業をみて「なんであの作業を任せてくれないのだろう」とできもしないくせにやりたがっていました。今思えば、見栄ばかり張っていたのだなと思います。実際にその作業を任せられ、やってみると失敗をして作業所に迷惑をかけることになってしまいました。自己顕示欲を出さないよう自分ができない作業であれば、無理をせず他の人に任せてもいいのだと思うようにして、自分を押さえるよう努力しました。自分のできる作業を一生懸命にやるのが大事なのだと学びました。



なかまの声 入所して18年

社会福祉法人
あかつきコロニー
就労継続支援B型 スペース・まどか
大関 英勝

いろいろな作業を通して、新しい仲間ができた、新任の職員などとの作業を通して自分自身が直さなければいけない悪癖を直していくことに追われた18年だったように感じます。

一つの作業所に長く働いているので、昔からの出来事を通して作業所の仲間たちと「こんなことがあった。あんなことがあった。」と懐かしむことが多くなってきました。

長く働いていると、色々な利用者が入所してきます。挨拶もできない利用者に対してきつい態度を取ってしまったこともありました。スペース・まどかには精神の病気を抱えた人が通所しているので挨拶をすることも難しいという事情を抱えている人がいるのですが、自分にはそういういたことがなかなか理解できず、苦勞しました。

今では、様々な利用者を見てきて、それぞれが病気を抱えながらスペース・まどかに通所しているのであり、それぞれ色々な性格をしているのだから相手のことを受け入れていかなくてはと考え、自分自身に言い聞かせています。

こんな自分が一つの作業所で長くいられるのは、色々な職員や仲間たちとのふれ合いが大きいと感じています。自分としても18年の長きにわたり一つの作業所に在籍できたことは大変うれしく思います。

まだまだ周囲に迷惑をかけることもあるかもしれませんが、職員や仲間たちに感謝しながら頑張っていきたいと思っています。

私の旅行記

冬期五輪観戦(感染対策)と必須アイテムのご紹介

沖縄コロニー 北田 恭子

私の趣味はスポーツ観戦です。特にフィギュアスケートが大好きです。

2018年、平昌五輪(韓国)観戦の際は、偶然にも後列が日本選手の家族応援団だったので、一緒に応援するうちに「選手の家族、気分になりました」。

大会期間中はノロウィルスが流行っていたので、紙石鹸やアルコールティッシュ・レトルト食品持参して外食をしない等々、必死に観戦中の感染対策に努めました(万が一の為に海外旅行保険の金額を増額しました)。

会場は寒いので、持参した座布団にカイロを貼って座り、衣類の内側にカイロを貼り付けます。銀色の極暖膝掛けシートを腰に巻き付ける等、保温調節もバッチリです。

お口の友「サーターアングギー&黒糖(ともに個別包装)」は、隣席の知らない人達と交流する時に役立ちます(大阪の「飴ちゃんおばちゃん、みたいですね)。観客同士の交流もスポーツ観戦の楽しみの一つです。車いす席を通りかかった際に、「この車いす、カッコいいですね。Good!」と親しげに話しかけてしまいました。

コロナ禍で2020東京パラリンピック延期は残念でしたが、2021年東京パラリンピック(チケット購入済み)・2022年冬季北京五輪観戦をと～っても楽しみにしています。



お薦めの本

完全教祖マニュアル
(架神恭介／辰巳一世 著)

筑摩書房

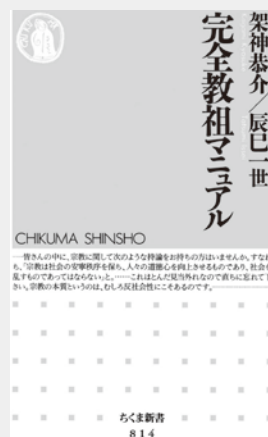
社会福祉法人 青森県コロニー協会
兼平 優哉

どこか怪しい響きをもつ「宗教」という概念。イスラム原理主義やオウム真理教が起こした事件から、日本における「宗教」のイメージはとことん悪いです。ですが、思い返してみると「宗教」は私たちの生活に根付いています。自称無宗教のそのあなたも、お盆にお墓参りをし、クリスマスにケーキを食べ、神社へ初詣に行くでしょう。「ゆりかごから墓場まで」、日常生活と宗教は切っても切れない関係なのです。

本書は、そんな「宗教」を客観的かつ論理的に分析し、誰でもわかり

やすく簡単に「教祖」になることを目的とした、『日本一役に立たないが為になる実践書』です。この本を読むだけで宗教の成り立ちや、思想の組み立て方、信者の獲得方法から甘い汁の吸い方等を、ウィットに富み、皮肉の利いた表現で教えてくれます(「皮肉」という言葉も仏教用語が由来だったりします)。私たちがどこか忌避している「新興宗教」を『歴史が浅いという事は、いま最も新しいナウイ宗教』と臆面もなく言い換える、気持ちの良い厚かましき。著者、架神恭介のキレの良いワイドセンスも本書の魅力です。

コロナ禍でじじめした気分こそ読んで頂きたい一冊、これを読んだあなたも「教祖」になろう!



甲 冑

自慢の作品 シリーズ

佐賀春光園 障害者自立支援施設 コロニーみやき 目標工賃達成指導員 柿原 弘貴

私は子供の頃より戦国時代に興味が、大河ドラマや書籍などで歴史に親しみながら育ってきました。武将が馬に乗り颯爽と戦場を駆ける姿に憧れ、自分もいつかは甲冑を身にまとい馬に乗りたくて夢を持つようになりました。甲冑姿で乗馬する為、まず、乗馬クラブに通い、次に甲冑の購入を検討しました。しかし、大学を卒業して間もない私では甲冑は高価でとても買うことはできません。そこで甲冑を制作することを思い立ち、資料を集めつつ、美術館巡りを行い設計図を完成させた頃には、結婚し長男も生まれ中々制作する時間が取れませんでした。長男が保育園に行きだし、時間が取れるようになってから、コツコツ制作を再開し完成まで2年かかりました。作業は根気がいるもので、鉄板を切り、叩いて曲げ、塗装し紐で固定を繰り返します。休みの日は古着屋めぐ



綱 領

現代社会には、様々な障害のある私たちの仲間が生活している。

私たちは戦後の混乱のなかから、自らが生き、働く場をつくる事業と運動を共同してすすめてきたが、障害を理由に生きる諸権利が制限され、その状況は今日もなお続いている。

私たちが願う進歩した社会とは、すべての人々の自由と尊厳が守られ、平和で人間らしい生活を送ることができる社会であり、このことは人類共通の願いである。

私たちはそうした人間尊重の理念にたち、完全参加と平等と障害者の働く権利の具体的な保障をめざし、わが国の関係制度や社会・経済・文化的諸条件の改善を図り、すべての人々が幸せに生きることができる社会の実現に向けて連帯し、積極的に行動する。

私たちの誓い

- | | |
|---------------|---|
| 開拓者の心 | 私たちは、試されたことのない道を自分たちの手できりひらく開拓者のところをもち続けます。 |
| 働く喜び | 私たちは、さまざまな困難を乗り越え、働く場やそれを支える暮らす場を創設し、働くことをつうじて積極的に社会に参加できることをめざします。 |
| 可能性の追求 | 私たちは、ひとりひとりの多様な可能性を信じて、新しい能力を発揮する努力を続けます。 |
| 連帯と協力 | 私たちは、お互いに協力し、励まし合い、かわることのない連帯で幸せを築くことに努めます。 |
| 豊かな社会 | 私たちは、心を合わせて、すべての人が障害の有無に関わらず、人としての幸せを感じられる、平和で豊かな社会の実現をめざします。 |

2014 (平成 26) 年 11 月 21 日
一般社団法人ゼンコロ 第 67 回総会 改訂承認

編集後記

ゼンコロも加盟している、日本障害者協議会(JD 事務局…東京都新宿区)が毎月発行している『すべての人の社会』は、障害者問題を取り巻く様々な課題・問題を社会に向けて発信していますが、とりわけ直近に発行された「12月号 No. 486」は重要課題が満載で、大変、読み応えがありました。その中の小さなトピック記事ですが、「増える無人駅 課題解消へ検討会」では、全国的に無人駅が増大し、大分県の車いすを使用している障害者が、移動の自由の侵害を理由としてJR九州を提訴したことを受け、国土交通省は障害者団体とJRや大手私鉄各社とで意見交換を行う検討会を設置し、11月16日に初会合を開催した、との記載がありました。朝日新聞も「無人駅とバリアフリー」のタイトルで11月22日、29日と2回に分け、それぞれ1頁全面を使い、無人駅の詳細と誰もが使いやすい鉄道のあり方を考える記事が掲載されていました。

実は、私どもの会員法人の一つである福岡コロニーが11月に発行した広報誌で、小峠理事長が『知ろうとしない日常』のタイトルのもと、無人駅増加の問題に触れておりました。その中で、「私たち(ゼンコロ)は、障がいのある人たちが日々さらされる多くの課題に、『座して待つより、自ら行動を起こし何かをしなればならない』という思いを持ち続けて過ごしてきました。ところがどうでしょう！従前に比べると、こうした動きがほとんどないと言っているのではないのでしょうか。法人で、ゼンコロで、動きがあるのでしょうか」と、大変きつい言葉をいただきました。

もともと、経営と障害者運動を表裏一体として進めてきた、ゼンコロの理念と行動がまさに問われ、一石を投じられた、と受け止めています。コロナ禍の厳しい中、それぞれの会員法人は大変厳しい経営状況にありますが、それでも何のため、誰のためにゼンコロは営々とその歴史を積み重ねてきたのか、改めて問われていると思わされています。(渡辺)

紙文書の電子化は働き方改革の第一歩

STELLAR GROUP

本 社 〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-3-6 麹町ビル TEL:03-6261-2050
 五反田 〒141-0031 東京都品川区西五反田 7-25-3 TH ビル TEL:03-6910-4871
 立 川 〒190-0023 東京都立川市柴崎町2-3-6 第一生命ビル TEL:042-525-2146
 荻 窪 〒167-0043 東京都杉並区上荻1-18-13 文化堂ビル TEL:03-6279-9626
 神奈川 〒231-0015 神奈川県横浜市中区尾上町6-86-1 関内マークビル TEL:045-651-7421



一 確かな経験と豊富な実績

昭和44年の創業以来、北海道から沖縄まで全国各地に600件の公立・民間の福祉・医療施設建設を手がけた、数多くの経験と実績があります。施設の移転計画、増改築計画等、どんなことでもお気軽にご相談ください。計画・申請から設計／監理にいたるまで一貫したお手伝いをさせていただきます。

株式会社 新環境設計
 代表取締役 荻原正之

〒113-0033 東京都文京区本郷4-9-15 ADMAXビル
 TEL. 03-5800-0321 FAX. 03-5800-0505
<http://www.shinkankyo.co.jp>

ゼンコロ出版物のご案内



常に先駆け走り抜く 一障害のある人と共に生きた丸山一郎ー (著者：渡辺忠幸)

ユーモア忘れず、常にさわやかに

東京パラリンピック、わが国初の福祉工場、国際障害者年、厚生省障害福祉専門官、アジア太平洋障害者の十年、そして死を賭してのILOへの提訴と、戦後の日本における障害者の制度や運動の、歴史を画した動きの中を常に先頭で走りぬけたひとりの男の瞳目すべき生涯を綴る。

長野県松本深志高校、慶応義塾大学工学部を卒業した丸山一郎がなぜ、障害者福祉の世界へ飛び込み、生涯のテーマとしたのか。その最初のきっかけは、50年前の東京パラリンピックにあった。

1,944円(税込) 2014年11月8日発行



明日をひらく言霊 ことだま しらべかずおき 調一興 (ゼンコロ元会長) 著作選集

重い障害のある1人ひとりの可能性を見出すこと

障害者の労働権の保障

家族依存型福祉からの脱却...

創造こそ、私たちの仕事!

結核による低肺機能の身を挺し、その実現に向けて最後までエネルギーを注いだ調一興の提言は、今なお斬新さを放ち、現在の閉塞状況をひらくヒントに溢れている。

編集：藤井克徳・佐藤久夫・小川浩・

河村ちひろ ほか

2,500円(税込) 2011年4月15日発行